日本武士道

五

洋学文庫
文庫8
A 357
5

6

前漢の于定国ハ東海郯の人なりその父于公縣
の獄吏郡の決曹となり罪を定むるさだを平ら
てその決せ〳〵所ハ人々恨みず郡中生きながら
ゐその祠を立つるゐ至り初めその閭門の壞
もこるをつくろふ時ゐ于公おいふたの門を高
く大く〳〵て駟馬高蓋の入る程ゐ立つべし我も
獄のつかさと〳〵て事を行ふゐ陰徳多きが故ゐ
我が子孫かならず家を興すべしといへりさて
大く高く建てけりその後定国ゐ至りて宣帝
の時ゐ丞相となり西平侯ゐ封ぜられその子永

大視文庫

ハ御史大夫とあり世々侯こうしとそ　蒙求 公高門　于

蒙求和歌

宋の鮑蘇が妻夫の心よつもをかりも違をを姑
を養ふけりと甚ゞ懇なり蘇衛の国ニ仕へて三年
を歴ける程ゝ姑を養ふけと怠らず蘇新しき婦
を迎へおきけるよそのの婦の許へさまゝの物
を贈りてなきけをかけ姑を養ふけといよ〳〵
深く謹みけり此事世ニ聞えて人の妻の好きハ
まゞ鮑蘇が妻のためしをひきける宋公聞き
て憐みたまひ号して女宋といふ蘇もその志を

思知りて遂ニふゝ心なりけりとそ　蒙求 宋
女愈謹　蒙求和歌

後漢の羊續南陽の大守となり民をあはれみ百
姓悦服す常ニ敝れたるを着粗なるを食とす府
丞嘗て生魚を贈れり續内へも取り入れず庭ニ
懸けておけり程歴て府丞まゝ魚を贈れりしか
ばもとの魚を見せてその心をなゝめてけりそ
の心の潔白なるを知るべし　蒙求　羊續懸魚
蒙求和歌
閔損ハ字を子騫といふ早く母を失ひ父後妻を
娶りて又ふゝりの子を生めり損至孝なれども

母はれを悪みて已が生める子には綿入れこる衣を着せ損るハ芦の花を入れこる衣をだに一重着せ〜り冬の夜は父の車を御し〜りしに手はゞえて索を落しけり父責めけれども答ふるはともかく〜文後の妻のまゝ子の為はあさけあきはとを覚り得て別れ去りぬんとすれを損あけきて云ふ母おはなるはハ一子はそ寒けれ母ぬ〜ハ三人の子寒かりぬんといふは父も理りと知りて思ひこゝろみけれ〜母も此あさけを嬉〜と思知りてその後ハ三人の子を同じさ

まはくしみぬとぬん　蒙求歌　岡損衣単　蒙求和歌

盛吉ハ情けある人にて物を哀みけり廷尉となりて冬の節を迎ふる毎にいましめける罪人を断りぬるしけり夜なゝ自ら巡りて其貌をも見るにぬもとの痕を難めるもありかなくきりは痛めるもあり親を慕ひ子を恋ふるもあり寒を憂へ餓をなげくもあり盛吉ハ筆を執り妻ハ燈を取り相向ひ泣きけるとそ　蒙求盛吉垂泣　蒙求和歌

孟子は母の家墓所は近かりき孟子幼き折戯れ遊ぶは墓所の事をぬ〜き母の云くは吾お

子を住ましむべき所にあらずとて去りて外に
移りしに傍に市ありき孟子戯れに物を賣り買
ふことをなす母の云くさくも吾が子を住ま
むべき所にあらずとてまた外に移りぬ其傍に
學校あり孟子戯れに礼讓の来をなす母の云
くさくさそ吾が子を住ましむべき所なりとて
住家に定めてけり孟子物学びて帰来れる汝
が学ふ所至りやと問ふにいまこしき由を答
へけり母機を織りさしてヲを執りて機を切棄
てけり孟子驚きて問へば汝が学問を廢るさ

とハ我が機を棄てたるんが如しといふに孟子
さとりを思知りて勤学して後に遂に大儒の
名を得るに人皆孟母ハ人の母たる道を知れり
といひき　蒙求　阿親断機　蒙求和歌

伯瑜幼き時過ちあれば母杖をもて打ちけり伯瑜
杖を受けて泣くさまを母老て後伯瑜を打つ
に伯瑜大きに泣きけり母云我れ昔汝を打ち
に泣くさと無かりき今更に泣くさと我れ恨む
る心あるべしと怪みしかり伯瑜答へて云母君
の若くして打ちたまひし杖ハ強く中りて身に

染みしが心ゝハ未ゞ傷まざりき今も杖を恨む
るゝハあらず杖の弱く中るゝつけて母君の哀
へて力尽きたまへるさとを憂へあげくありと
いへり母ぎれを聞きてせんなくあはれと思
へりとあり　蒙求　伯瑜巨杖　蒙求和歌

前漢の韓信ハ淮陰の人なり若かりし時家貧し
かりき嘗て下郷の南昌亭の長ゝ寄食せしゝ長
の妻信を厭ひて朝ゝ早く炊きて臥床の中うて
食し食時ゝ信往けども膳を具へず信さとを去
り城下ゝ至りて魚を釣りけるゝ漂母ありて信

を哀み食をたゝむるさと数十日ありき信此情
けを思知りて必ず重く報いんといひしゝ漂母
が云大丈夫自ら食むさと能はずゆ吾れ王孫を
哀みて食を進むるなり報いんさとをゞ望まず
と答へけり信後ゝ楚王となるゝ及ひて漂母を
召して千金を與へ下郷の亭の長ゝハ銭百を與
へこりとぞ　蒙求　漂母進食　蒙求和歌

魏の太武西河ゝ獵せし時古弼ゝ詔して肥馬を
騎士ゝあゝへしむさるゝ弼さとさらゝ弱き馬
を與へき太武大ゝ怒りて尖頭奴敢て我をきり

もりせう臺ゑ還らざまゝ此奴を斬らんとゝた
る時ゑ彌ゞ屬吏皆懼まわるゝきけまを彌ゞれ
ゑ告げていふ君ゑ事ふるもの君の遊をして心
のまゝあらざらしむとも其罪ハ軽く不慮ゑ備
へざるハ其罪重し今北狄南夷恣ゑ彊を侵せる
さと吾ゞ憂ふる所なり吾まかねて肥馬を選ひ
おけるハ軍実ゑ備へんゞ為なり苟も國家ゑさ
へ利あらゞ何ぞ死を惜まん明主ハ理をもて干
をべきなり罪ハ我ゑあり卿等ゑハ咎め無けん
と太武此言を聞きて歎じて曰く臣あるゞと此
の如きハ国の宝なりと彌ゞ頭尖まり太武嘗て
筆頭と名づけ時の人ハ筆公と呼びりと知囊一
吐谷渾の阿豺疾あり子二十人あり阿豺その弟
の慕利延を呼びて汝一つの箭を取りて折まと
いふ慕利延これを折まり阿豺また十九の箭を
取りて折まといふ慕利延これを折るゞと能を
ゞ阿豺ゞ曰く汝ゞ輩知まりやいとへる者ハ
折まやをく衆き者ハ摧けやをきゞとを力を合
をせ心を同じくして然る後ゑ家ハ固かるべし
と誡ゑ兄弟親族ハ相依まゞを久しきを保つべし

然らざれを忽ち亡ひん　知囊一

前漢の霍光ハ昭帝を補けて柱石の臣なり時に燕王旦怨望して反せんと謀り上官桀も霍光の權を忌めるに因り燕王と謀を通じて詐て人を〳〵て燕王が為に上書せしめて言へるハ光都を出で、郎羽林を肆し道を行くに蹕をとちしめ檀に調して幕府の校尉を益し權を專ら自ら恣にして疑らへハ非常の事あらんとさて霍光が出沐の日を待ちて奏せりさるに昭帝その書を抑へて下さず霍光その事を聞き畫室の中に止まりて入らず帝大將軍ハいづくにあるを問ふ樂昏へて燕王が其罪をあばけるが故に敢へて入らずといふ帝光を召して入らしむ光冠をぬぎ頓首して謝せり帝曰く將軍冠せよ朕汝の昏の詐なるを知り將軍罪なし曰く將軍が校尉を調せしより未だ十日あらず燕王いかでかこれを知らんと時に帝年十四なりき左右の者皆驚けりさて上書せし者ハ果して逃げき

北海の相孔融太夫慈が地を東海に避けうりと

聞きたばしく人をしてその母を訪をしめ物を
贈りり後融黄巾の賊に囲まれし時慈たまく
還りてその事を聞き即ち間道より囲みの中に
入て融に見えうり融事の急なるさとを平原の
相劉備に告げんとすれども賊の圍み密にして
衆人出でんさとを難んず慈乃ち弓を持ち二騎
を従へおのく的を持てめ門を開きて出づ
敵駭きて観る慈進みて城下の塹の内に至り的
を建てしめてされを射射畢りて還る明日も然
くし此の如くせしさと二度に及びしかど敵或
は立ち或は卧し後には立つものあきに至り
時慈馬に鞭打ちて直にその圍みを突出でうり
敵の覚るさろにはもめ馳せ去りぬさと数里な
りき意に劉備の許に行き兵を乞ひ来りて囲を
解けり慈ち斯く危きを救ひしも偏に融おその
母をいこはりし恩に報いしなり 智囊五

晉の元帝の叔父東安王繇成都王穎に害せられ
禍の及ぶんさとを懼きて潛に出奔して河陽に
至りし時津の吏に止めらる從者宗典といふ者
後に至りしに鞭まて王を拂ひて舍長に官に

貴人を禁ずと聞きしに汝も拘せられしのとい
ひて大に笑ひしかど遂に釈されて過ぐさと
得たりと忠ありて智ありといふべし　智囊六
宋の寧宗の時趙方荊湖の制置使たりき或日方
将士を賞せんとすたりしその恩労を償ふに
当らざりしかど軍中変を為さんとす方の子
蔡時々年十二三なりしお禍の父に及ぶんとす
を覚り急に呼びて是も朝廷の恩なり本司より
別に賞賜あるべしといひしかを此一言にて軍中
の人心定まりとぞ葵警報を聞く毎に諸将と偕
に出で敵に遇へば輙ち深く入て死戦せり諸将
惟制置の子を失ふんとを恐れ死を盡してさ
れを救へり斯くしてたびたび勝を得たりと
なん　智囊六
晋の恵帝の太子遹幼きより聰慧なり宮中嘗て
夜失火あり時武帝楼に登て火を望めりその
時太子帝の衣を牽きて暗き方に誘へり帝その
故を問へば答へて暮夜倉卒なる時は非常に備
ふべし人主を照し見しむべからずといへり時
に太子年纔に五歳なりき武帝大にこれを奇な

りとせり又嘗て帝に従ひて豕牢を観しに時帝は
言へるハ豕甚だ肥えたり何ぞ殺して士を養た
まはざるや五穀を費さんむといふ帝その
背を撫でゝ曰く此児吾が家を興たべきかなと
さるに太子後竟に賈后に譖せられて死せり
直に愍むべきかな 智嚢六

高定年七歳なる時尚書を讀みて湯誓に至り父
の郢に問て曰く如何ぞ臣として君を伐ちこと
と父の曰く天に應じ人に順へるなり定ハまこと
命を用ひ祖に賞せん命を用ひ社に戮せ
んとあり豈に人に順ひしなるんやと言ひしに
父もされに答ふるなりとそ伯夷叔
齊此事を爭ひて千年定まらざりし事を高童一
言にて決せりといふべし 知嚢六

宋の司馬光幼き打郡児と戲れしに一児誤
て大なる甕の中に墮ちて底に没せり群児皆驚
きて走りしに光ハ去らずして即ち石を執て甕
を撃ちしかば甕碎けて彼の児溢れ出でしに童
子にして此倉卒の機轉感ぜるに堪へしに又文
彦博をさなき時群児と毬撃ちせしに毬柱の穴

の中に入りて取るさと能をざる見てやがて水
をもて穴に注き入れ毬の浮び出づる取りと
ぞ此二人後に共に大名を成せり幼き時賢き者
は成長して愚なりといふさとあれと必しも然
らず智囊六

曹冲幼きより聰慧なり孫権嘗て大象を曹公に
送りり曹公その象の身の重さを知らんとて郡
下に問へるにその計を考へ得るものなかりき
その時曹冲がいふ象を大船の上に置きて其水
痕の至りる所に刻みなり象をあげて他の物
の重さを量らば知らるべしと此時曹冲僅に五
六歳なり曹公大にその智に驚けり 智囊六

陳矦凌陽の臺を作りていまと終らざるに罪に
觸れる誅せられし者数人ありて三人の監吏又
執へらるされと群臣敢て諫むる者なりき孔子
たまたま陳に来りて陳矦にまみえ興に臺に登
りて観こうしが孔子進みて賀して曰く義なる
なる臺や賢なるなる君や古より聖人の臺を作
りるいなくんぞ一人をも罪せずして能く功
を致りるさて此の如きものあらんと陳矦これ

を聞きて默然こうしが遂に人をして執へこうし
し吏を赦さしめんとすん　智裏七
後唐の莊宗中年の地に獵して田を蹈みあらせ
り中年の令某馬前に出でゝその事を諫めける
に莊宗大に怒り引出りて斬らしむ特に伶人敬
新磨といふもの諸伶をひきゐて走て其令を追
ひ擒へて馬前に至り責めて曰く汝縣の令とし
て天子の田獵を好みこまふことを知らざやい
かんぞ民をかるして耕作せしめて年貢を供せ
る何ぞ汝が民を飢えしめ此田地をあけ

て天子の獵を待こざる汝が罪死に当まり請ふ
速に刑に行をんと莊宗これを聞き大に笑ひて
その令を赦せり智裏七
唐の建中の末に李希烈反して汴州を陷しいれ
陳を襲をんと謀まり李侃項城の令たりしが逃
まを去らんとせしその妻曰く冠至らを守るべ
しかるあらば死せんいかで逃るゝことあらん
若し賞を重くして死士を募らを守るべけんと
侃乃ち吏民を召して告げて曰く今ハ誠に汝等
が主なり然まども歳満つまを去り吏民が此土

に生ずべきが如きにあらず汝等が墳墓皆あり相
與に死力を竭くして守るべしと衆皆泣けり乃
ち狗へて曰く瓦石をもて賊を擊ちし者には千
錢を以て賞せん力矢もて賊を殺しし者には万
錢を以て賞せんと数百人を得て率いて城に乘
せしめて曰く項城の父老は義を守りて賊に降
らず吾が城を得ることもて威とするに足らず徒
に和を失ちんのみ益無かるべしたましく侃
流矢に中りて走還りぬ妻怒て曰く君あらざば
誰か城をらん外に死せんは休に死ちんに愈ら
ざやと侃まこと城に登りさて賊も引去りて縣
城も終に完かりき智嚢九
劉聰が妻の劉氏は名を娥といひ甚く聰に寵せ
らる既に后に立てられ聰宮殿を起して娥を置
けり廷尉陳元達その事を切諫せしに聰大に怒
りて元達を斬らんとせし娥窃に戒めて刑を停め
手疏して奉るその畧に曰く廷尉の言国の大政
にあづかれり忠臣豈にその身の為にせんや陛
下の此怒も妾によりて起り廷尉の禍も妾によ
りて招けり人怨み国怨み皆妾に帰し諫を

拒み忠を戮する唯妾の故なり古より敗亡の轍
婦人に因らざるものあらず妾古事を覧る毎に
忿々として食を忘れこうしが何を思ひん今日
妾自らかれを為さんとハ後人の妾を視るかと
まこと猶妾の前人を視るが如くならんまこと何の
面目のありて仰て中櫛に侍らん請ふ此堂に帰
死して陛下の色に荒むの過ちを塞かんと聰表
を覧了りて群下に謂て曰く朕元建に輔あるか
と公の如く内輔あるかと娥の如くバ朕まこと何
をか憂へん　智襄九

李邦彦父ハ嘗て銀工こうき或人その事を言
いて邦彦を詰りしに邦彦かれを恥ぢて帰てその
母に告げしに母の曰く宰相の家にして銀工を
出さをかれ差つべきかり銀工家より宰相を出
しいかとかれ美事かり何の差つるかとのあら
ん　智襄九

秦と趙と長平に戦へり趙王秦の反間を信じて
趙奢の子の括をもて将として廉頗に代へんと
を括平生兵をたやをきかとに言ひ奢ハ然りと
せさりきかに至て括まさに行かんとを括の

母上書して趙王に言て曰く括ハ將こらしむべ
からずと王何の故ぞと問ふ對て曰く初め妾そ
の父に事へし時に父將こうしに自ら飯飲を奉
じて食を進めし者十餘人ありて友とせし者も
數百人ありき又大王及び宗室より賜はる物ハ
悉く軍吏に與へ命を受けし日ハ家事を問ざ
りきさるに今括一旦將とあり東向して軍吏を
朝せしめしハ敢て仰き視る者あり王の賜ひし
金帛ハ家に藏して日に便利なる田宅の買ふべ
きものを視てこれを買へり父子志異なり願た
くハ王遣るなかと勿れと王の曰く置け吾既に
決せりと括が母因て曰く王終に括を遣らば若
し称たさるなかとありとも妾ハ坐せらるゝなと
無きを得んと王許諾せり括既に將となりて悉
く廉頗の約束を変ト兵敗れて身死せりされと
趙王も括が母の先に言ひし所をもて竟に誅せ
さりしとそ智囊九
南唐の龍武の都虞候紫克宏ハ再用の子なり沈
黙にして施すことを好み家産を事とせず日に
賓客と遊宴して未こ嘗て兵事を言はず時の人

将帥のオあらすとせりさるに吳越の常州を圍むに及ひて克宏死を行陳に致さんと請い其母も表を奉りて克宏父の風あり將こらしむべしと称し若し任に堪へたハ拏戮をも甘んぜんといふ宗も遂に用ひて左武衛將軍とし常州を救ハしめに果して大に敵を破れり 智襄九

唐の李景讓が母鄭氏早く寡となり家貧しく子幼くして母自らこれに教ふ性嚴明にして景讓後官高く髮既に斑白なるに至りしに少し尚過ちあるときハ捶楚せり景讓浙西の觀察使こう

し時牙將の意に逆ふ者ありてこれを杖して遂に死せり軍中憤怒して変を起さんとす母その事を聞きて出で、廳に坐して景讓を庭に立ゝしめて責めて曰く天子汝に方面を托せり豈に國家の形法をもて喜怒の資として妄に無罪を殺さゝとを得んや万一一方の不寧を致さを豈に唯上ハ朝廷に負くのみならん垂老の母をして義を含みて地に入らしむ何を以てか汝の先人に見えんとて左右に命じてその衣を褫ぎその背を撻せんとせしに將佐皆これを釈さんこと

を請ひ稍久しくして乃ち釈せらるるよりて
軍中遂に安かりき 知襄九
後漢の江革ハ齊の臨淄の人なり少くして父を
失ひ母と居りしに乱に遭ひ母を負ひて難を逃
れ阻険を歴尽し常に遺穂拾ひあつして母を養
へり志はしば賊に遇ひ或ハ却して率ひ去らん
とするに志を革渫泣して老母ありといひ
その信実の辞人を感動せしめ賊も犯すに忍
びずして去れり革転ずして下邳に寓せしに貧窮
りて裸跣行傭して母を養へり建武の末に郷里
に帰りしに母の老いたるをもて揺動せしめじと
て自ら輦の中にありて車を引き牛馬を用ひず
是によりて郷里の人江巨孝と称せり母終りて
後挙げ用ゐられて諫議大夫にまで至れり 蒙求上
江革巨孝
晋の王祥王覽ハ兄弟なり母の朱氏兄の祥をあ
しらふに無道なり覽年数歳なる時兄の撃ち
ものを見ては泣きて兄を抱きて常に母を諫め
しかども母も少しく凶暴を止めしかども母志はしば非
理に祥を使へども覽も共に母に仕へけり母又祥の

妻をたゝへたけ使へハ覽の妻も赴きてされを共
ゑせずかゞ毋されを患へて止めり祥父を喪ひ
て後ハ漸く世ゑ誉まあり毋深くされを疾み窃
に毒酒を祥ゑ飲ましめんとす覽されを知りて
自ら起ちてその盃を執まり祥もその毒ありや
を疑ひて爭ひて與へず毋されを見て遽ゑ奪ひ
て酒をすぼすりその後ハ毋より祥ゑ食を與ふ
るすゝとあれを覽必ずまづされを試みぬ覽の孝
友の名も兄ゑ亜げり仕へて光祿大夫ゑ至まり
蒙求上　王覽友弟

後漢の陳重ハ豫章宜春の人なり少くして都陽
の雷義と友へり太守重を孝廉ゑ挙げゝゑ重義
ゑ讓まりされを大守聽かず明年義も孝廉ゑ挙
げられて俱ゑ郎署ゑあり後又俱ゑ尚書郎ゑ拜
せり義同時の人ゑ代りて罪を受けて退きしか
を重も義の去まるを見て病ありといひて職を
退けり義後又茂才ゑ挙げられしゝども重ゑ讓
りて命ゑ應せざりき鄉里の人語りて曰く膠と
漆とハ堅しといふとも陳と雷とゑハ若かをと
後二人共ゑ御史ゑ至まり蒙求上　陳雷膠漆

後漢の范式ハ山陽金郷の人なり少くして大学に学ひ汝南の張劭と友となり二人並に郷里に帰省せり式劭に謂て曰く後二年にして還る〻過きて尊親を拜し稚子を見んと乃ち期日を定めて別れぬ後期日に至り劭その事を母に申してその設けをあさんとせしに母の曰く二年の別れに千里の契りあり汝何ぞ相信ずるかとの深きと對へて曰く范式ハ信ある人なり必ず違へじと母曰く若し然らば汝が為に酒を釀さんとその日に至りしに范式果して到り堂に升り

て拜飲し歡を盡して別れ去りとそ　蒙求上　張鷄黍　范

前漢の丁公項羽の將となり高祖を彭城の西に逐ひ短兵接して高祖危し高祖顧みて丁公に謂て曰く両賢豈に相戹せんやと丁公乃ち兵を引きて去れり項羽の滅るに及びて丁公高祖に謁見せしに高祖丁公を捕へ軍中に徇へて曰く丁公項王の臣となりて不忠なり項王をして天下を失なはしめし者なりとて遂に斬れを斬りて曰く後の人臣となる者をして丁公に倣ふこと無からしむるなりと　蒙求上　丁公遽戮

前漢の季布ハ丁公の兄なり亦項羽の將となり
てたびたび高祖を窘めき項羽滅びて後高祖布
を千金を購ひ求めぬ或人高祖に説きて曰く季
布何の罪ある臣ハおのおのその主の為に職
を守るのみ項氏の臣悉く誅をべけんや今上
始めて天下を得たまひしに私の怨をもて一人
を求めらる何ぞ示さとの廣からざると高祖
乃ち布を赦し召見て郎中に拜せり蒙求上諸季布一
晉の周處ハ義興陽羨の人なり膂力人にすぐれ
て細行を修めず州里これを忌ふ處も自ら人に

悪まるゝを知り慨然として改励する志あり父
老に謂て曰く今時ハ和し歳ハ豊なるに何を苦
みてゝ乐まざると又老歎じて曰く三害いまゞ
除かゞ何の乐みのあらんと處の曰く何を三害
と謂ふぞ答て曰く南山の白額の猛虎と長橋の
下の蛟と子とをわれ三害なり處ゞ曰く吾能くさ
きを除かんと乃ち山に入りて虎を射殺し水に
入りて蛟を搏ち殺し遂に志を励し学を好み義
烈に志し言ハ必ず忠信なるを旨とす晉に仕へ
て御史中丞となり凡そ糾劾する所ハ寵戚をも

避けず武人斉万年の反せるに及び朝臣處が強
直なるを悪みて皆いふ處ハ名将の子にて忠烈
果敢なりと乃ち夏侯駿に隷して西征せしむ伏
波将軍孫秀處に謂て曰く卿に老母ありその事
を言て辞をへしと處曰く忠孝の道ハ烏ぞ二つ
なからん全きことを得ん既に親に辞して君に事
へ勇り父母安ぞ得て子とせんと既にして戦敗
し左右退かんことを勧む處劒を按して曰くこ
れ吾が節を效し命を授くる日なり何の退くこ
とをせん且古の良将ハ命を凶門に受けて出づ

盡く進むことありて退くことなし無きなり諸君ハ
信に負けり勢必ず振ふ我ハ大臣なり身をも
て国に殉せんとまと可ならずやとて遂に力
戦して死せり蒙求上　周處三害

晉の胡威ハ淮南壽春の人なり父の質忠清なる
をもて称せられ魏に事へて荆州の刺史となる
威京より定省せしに家貧くして車馬僮僕もな
く自ら驢を駆て単行せり既に至り父にまみえ
て帰る時父絹一匹を与へ威の曰く大人清
高なりいづくより此絹を得たまへる父曰く

さるに吾が俸祿の餘なりと威受けて辭して帰り遂
に質が帳下の都督に與へしより威後に徐州の刺
史となり政術を勤めて風化大に行はれき入朝
せし時武帝謂て曰く卿と父と何ぞ清なると
對て曰く臣が父の清は人の知らんことを恐ぶ
臣が清は人の知らざらんことを恐る臣父に及
ばざること遠しと蒙求上　胡威推縑

後漢の董宣光武帝の時に洛陽の令となりし時
に湖陽公主の奴白日に人を殺して公主の家に
匿れ吏捕ふることを得ず公主の出づるに及び
奴を騎乘せり宣これを伺ひ車を駐め馬を扣
へ大言して公主の失を責め奴を叱して車より
下し手ずから擊てこれを殺せり公主帝に訴へし
かば帝怒て宣を召し箠にて擊ちて殺さんとす
宣叩頭して曰く願をくは一言して死ん曰く
陛下の聖德を中興せらる然るに奴を縱して
良民を殺さしめ何をもてか天下を治めん臣
箠せらるゝを待たずして請ふ自殺せんと即ち
頭を搥に擊ち血流れて面に被ぶり帝宣を
して公主に謝せしむれども宣從はず強ひてその

頭をさけしめんとせれども両手もて地を突き
張りて終に俯せるさまを肯んぜず公主の曰く
文叔白衣なりし時亡命を蔵し死罪を匿しこれ
ども吏敢て門に至らざりき今天子となりてそ
の威一令に行はるゝさまと能をさるかと帝笑て
曰く天子は白衣と同じからぬと因て強項令出
でよと敕して銭三十万を賜へり宣悉く銭を以
以て諸吏に分ち與へんとせそ　蒙求上　董宣強項
魏の文侯士大夫と坐せし時問て曰く寡人は如
何なる君ぞやと群臣皆曰く君は仁君なり次に

翟璜に問ふ君の弟をもて封ぜんとして君の長子
を封ぜられき臣ものゝ君の仁君あらぬを
知きりと文侯怒て璜を逐へり璜起て出てぬ次
に任座に問ふ對て曰く君は仁君なり臣嘗て其
君の仁なる者はその臣直なりと聞けり先きに
翟璜の言ひしことを直なりとをもて君の仁な
るを知きりと文侯その對を善しといひて翟璜
を召還して上卿とせり　蒙求上　翟璜直言